

山田 龍雄

(よかネットNO.64 2003.7)

10数年前からの沖ノ島への思い

私の沖ノ島への憧れは10数年前にさかのぼる。

ある会合で、宗像市職員の方から、小さな漁船で吐きながら沖ノ島へ行った体験談を聞き、単純に大変だろうけど行ってみたいと思った。また、司馬遼太郎の小説「坂上の雲」の中で、ロシアのバルチック艦隊が日本海側、太平洋側どちらから進んでくるのかを各地点で偵察していたときに、最初に発見した島が沖ノ島であったと記されていた。このことが非常に印象に残っており、この島から実際にバルチック艦隊が発見されたという海を眺めたいと思っていた。

それから10数年が経過し、昨年、当社が加盟している協同組合「地域づくり九州」の理事会で雑談の場になったときに、「“地域づくり九州”という名前を付けているのであれば、遊びで九州の秘境や面白いところを探索した方が良いのではないか」との話で盛り上がった。そこで九州探索の第1候補として「沖ノ島」が取り上げられ、私が企画担当者となった。

当然、沖ノ島へは日常的に参観できないが、年に数回は一般参加できるイベントがあるとの情報は得ていたので、3月の初めに早速宗像大社に連絡し、参加希望者名簿を送った。4月半ばに大社から案内状が個人宛に送られ、さらに最終的に個人で参加表明の葉書を出すと、整理番号付きの葉書が届けられた。その葉書が沖ノ島へのパスポートとなる。今回、私たちのグループは5名で参加した。

宗像大社は全国区である

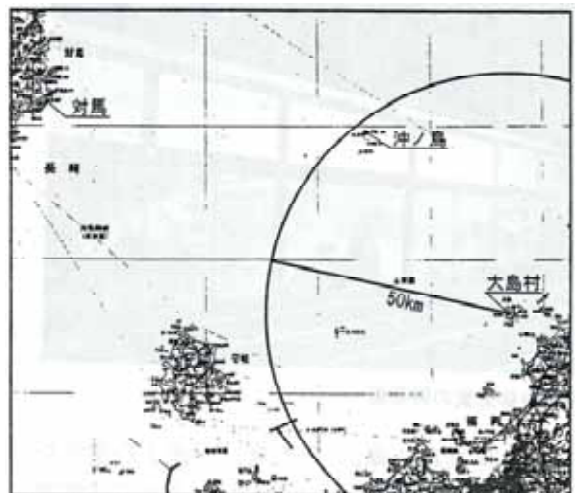
沖ノ島に渡る前日の18時に、大島村の中津宮に行くと、200人以上の人が集まっていた。中には山伏の格好をした人などもいた。あとで聞くと三重県、鹿児島県、北海道など全国から参加しており、改めて宗像大社が全国区であることを再認識した。また、中津宮には女性のグループの方も参

拝にいられていた。女性は沖ノ島へは行けないが、中津宮までは参拝するようだ。その後、受付と当日の漁船の班分けが行われ、さらにライフジャケットも渡された。

漁船で座るポジションが決まると動けない

前日は民宿での食事を済ませ、22時過ぎには床についた。興奮していたためか、同室メンバーからのいびき攻勢のためか、寝不足だったが5時前に起床した。民宿の人に波の状況を確認すると、晴天であったが前日までの低気圧のせいで、波は2~3mと高いらしく、出航するかどうかは五分五分とのことであった。

内心、吐くことは覚悟してきているとはいえ、波が高い中で行くのはいやだなあという思いと、折角来たのだから無理してでも行きたいといった思いが交錯した。しかし、6時過ぎに集合場所に行ってみると既に漁船へ荷物を運んでおり、出航が決定したことがわかった。当初、宗像大社事務局から送ってきたスケジュール表をみると、大島から沖ノ島までは3時間かかるようになっていたが、なんと1時間20分程度で到着した。最近の漁船の性能のすばらしさに感心したが、時速40kmのスピードで荒波をかき分けることから、縦揺れに



図表1 沖ノ島は大島から約48kmの孤島



玄界灘を疾走する漁船



漁師さんの手作りの魚の煮付けで直会(なおり)



沖津宮での大岩。この上で祀り事が行われていた。

加え、たまに大きな横波からの横揺れもあり、結構な迫力であった。一端漁船で座る場所を決めるとほとんど動けない。グループの中には何人が吐く人もいたが、私は運良く運転席の後上部に設置された簡易ベットに座ることができ、吐き気は喉元まで来ていたが、かろうじて止まってくれた。

日本の神道はおおらかである

上陸すると、船着き場の隣の小さな入り江で既に数10名の方が、真っ裸で御被をしていた。これ

はなかなかの迫力である。私たちグループも、すぐ真っ裸になり、海に浸かった。5月末の海水はやや冷たかったが、この上なく清々しいと感じると同時に、宗像大社の神様には申し訳ないが単純に『これは面白い』と思った。

その後、本宮での大祭には時間があったので、頂上(一の岳243m)まで一気に登り、周辺の海を見渡したのであるが、誰もちゃんとした地図を持ってきていなかったことから、霞んで見える島々を見て、みんな勝手に「あれは対馬だ、いや壱岐だ、五島列島の先端部分だ」などと言っていた。地形に対するイメージが、これほど個人によって違うものかと変に感心してしまった。

本宮は、船着き場から10~15分程度登ったところにある。それは大きな岩に密着するように設けられ約2間四方ぐらいのこじんまりとしたお宮であった。しかし、5~6世紀にこの大岩の上で祀り事していた遺跡が発見されており、本当の本宮はどうもこの大岩であるらしい。

大祭が終わると、直会(なおり)の儀式があった。直会といっても形式的なものではなく、1本300円のビールを購入し、漁師さんが造ってくれた鰯や鰯の煮物を肴にし、船着き場での野外食事会であった。沖ノ島は、神聖な島であることから、当然、写真も禁止であろうと思っていたのであるが、写真撮影も自由であり、直会もそれほど格式張ったものでなかった。やはり日本の神道はおおらかである。

帰りは折角、用意したレインコートを活用しなくてはと思い、甲板の真後ろに座ったことから、1時間20分間、滝のような海水を全身に浴び続け、全く酔う暇はなかったものの、ずぶ濡れとなってしまった。今年は、十分海水を浴びたので、海水浴に行かなくてもよさそうだが、沖ノ島へは、機会があれば再度挑戦したい。